

インタビュー 20歳のスタートライン

20歳で迎える、自らの手で切り開く新しいスタートライン。目標を抱き、チャレンジする3人にインタビューしました。

20歳



おのがわ みのる
小野川 稔さん 20歳

東洋大学2年生。大綱中学校出身。高校在学時に、ユースオリンピック競技大会(2014年南京)男子10,000メートル競歩で金メダルを獲得。けがなどの理由で選手を引退するも、経験を生かし、スポーツトレーナーを目指す。

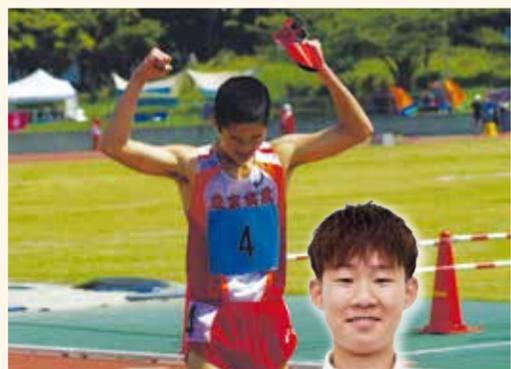
経営者になり、陸上部を立ち上げる

ゴールじゃない、スタートだ

夢と目標を立てて努力することが好きです。陸上を辞めるときも、次の目標が定まっていたので、両親が背中を押してくれました。僕の夢は、2028年のオリンピックで選手をサポートすること。目標は、そのためにスポーツトレーナーになることです。大学でしっかり勉強して、トレーナーの資格を取り、夢への第一歩としたいです。

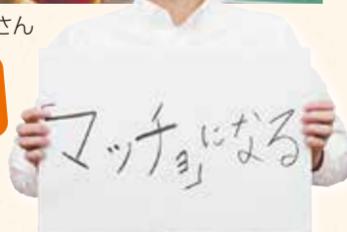
仲間との絆、支えてくれた人への恩返し

僕にはもう1つ夢があります。会社の経営者になり、陸上の仲間をスタッフとして呼び、みんなで陸上部を立ち上げることです。難しいと思われるかもしれませんが、僕は本気ですし、仲間も応援してくれています。陸上に携わり続けることで、今までお世話になった人たちに恩返しをして、仲間との絆も大切にしていきたいです。



選手時代の小野川さん

2018年の
目標



※小野川さんは座談会(7ページ)にも参加しています



練習中の一ノ渡さん

東京オリンピックで金メダルを取る

練習した分、自信になる

練習した分、記録が伸びることが、ライフル射撃の魅力です。試合では、「慎重に、丁寧に」を心掛け、自分の世界に入り、無心で的に向かいます。集中力が大切ですので、強い心を持つよう、これからさらに練習していきます。常に優勝を目指して、年を取っても生涯現役で選手としてやっていきたいです。

いざ夢の舞台へ

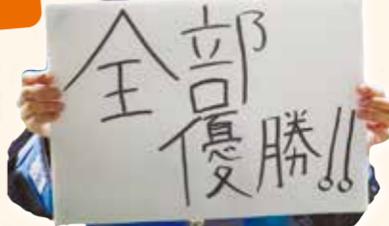
「東京オリンピックで金メダルを取ること」が、私の夢です。温かく見守ってくれた両親や厳しく指導していただいた監督などもいるので、ライバルたちに勝ってオリンピックに出場し、絶対に金メダルを取りたいです。また、今年は大学生としてインカレに挑む最後の年なので、個人だけでなく団体でも優勝して、みんなで喜びを分かち合いたいです。



いちのわたり さくら
一ノ渡 桜さん 21歳

法政大学3年生。高木学園女子高等学校出身。高校からライフル射撃を始め、高校3年生で日本新記録を樹立し、全国優勝。大学進学後も全日本大会や国体を連覇。国際大会であるパノニア杯(2016年オーストリア)で優勝するなど、世界でも活躍している。

2018年の
目標



きたじま だいき
北島 大輝さん 20歳

本郷特別支援学校卒業後、社会福祉法人「かれん」に勤務。仕事が終われば、小学2年生から始めたダンスで毎日汗を流す。700人以上のダウン症の人が在籍するダンス団体「ラブジャンクス」に所属し、外部のイベントに出演するマスタークラスでパフォーマンスを披露し続ける。

生涯ダンスを続ける

生きがいを大切に

仕事が終わると、小学2年生から始めた、ダンスをすることが僕の生きがいです。ダンスを通して、たくさんの仲間ができて、体力や自信もつきました。6月に大きなイベントがあるので、しっかり練習して、家族や仲間に僕のパフォーマンスを見てもらいたいです。東京パラリンピックの式典で、「ラブジャンクス」のメンバーとしてダンスを披露することも、僕の大きな夢です。

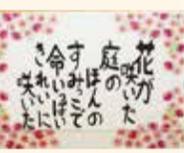
自分らしさを大事に

ダウン症の人は筋力が弱く、ダンスをすることは難しいといわれます。だからこそ、ダンスができる今を大切に生きたいです。病弱だった幼少期からずっと支えてくれる両親への感謝の気持ちや、仲間を大切に、いつまでも自分らしく生きていきたいです。絵や書を書くことも好きで、作品の展示や販売もしています。ぜひ大倉山の「かれん」に見に来てください。



ダンスを披露する北島さん

2018年の
目標



北島さんの作品

座談会

若者が 思いを語る

大人の仲間入りをする20歳。大人になると、人生を左右する決断が増え、自らの行動に責任が伴います。これからの将来を担う、区にゆかりのある若者にフォーカスします。

●問合せ 区役所広報相談係 ☎540-2222 fax 540-2227

将来のまちの担い手となる若者。港北区で生まれ育った、20歳前後の5人に集まってもらい話を聞きました。彼らは、今、そしてこれからのどんな思いを抱いているのでしょうか。若者らしい意見の中に、意外な声も聞こえてきました。

彼らの目に映るふるさととは

田邊：日吉の公園に、母と祖父とよく行きました。祖父が竹馬を作ってくれたし、自転車の練習もした覚えがあります。都内に比べると栄えていながらも、自然が残っている印象です。



たなべ ももこ
田邊 明々子さん(18)
日吉出身

竹内：確かに港北は自然が多いイメージ。小さい頃は、綱島公園のログハウスやプールでよく遊びましたね。急な坂を上った先にある公園にワクワクしていたし、たくさん遊んで体力がついたと思います。

小野川：遊具はあまりないけど、太尾見晴らしの丘公園で、サッカーや鬼ごっこをして走り回っていました。(竹内)裕人は足を骨折しているのに、サッカーの練習後に自転車で帰っていたよね。

竹内：家に帰ったらゾウの足みたいになっていて、後で大騒ぎ(笑)。

小野川：やっぱり(笑)。大倉山は本当にいい所。外から地元に戻ってくると、心が温まるし、何より駅前の雰囲気が好き。

竹内：駅によって色があるよね。大倉山は住宅が多く、落ち着いている感じ。

北村：駅でいうと、日吉はコンパクトにまとまっている感じ？

高原：日吉は便利ですよ。商店街はにぎやかだし、地区センターや松の川緑道も整備されているし。駅ではないけど、鶴見川の河川敷はマラソン大会で走らなかった？

小野川、竹内：僕らは部活の朝練でもよく走っていたよ。だから、河川敷にあ



たかはら なお
高原 菜生さん(22)
日吉出身

まりいい思い出はないな(笑)。
一同：(笑)

未来に残していきたいもの

田邊：日吉に帰ってきたときに、落ち着くためにも小さい頃に遊んだ公園を残していきたいですね。

小野川：将来、子どもができたなら公園は欲しいと思います。公園は、親も子どももコミュニケーション



参加者の皆さん

を取れるいい場所。他にも太尾小の前の緑道の桜はとてもきれいだから、自分の子どもにも見せてあげたい。

高原：子どもでにぎわう場所があったらいいですね。子どもの防犯のためにも、駅前だけでなく、離れた場所の街灯を整備して、まちを明るくしたい。街灯は心を落ち着かせる青色がいいですね。

北村：その通りだと思う。新しい小学校が建つなど、発展する一方で、住民の安全面はしっかり考えていかないといけないですね。

竹内：僕は自分の記憶の中にあるもの全てが、少しでも長く残っていてほしい。父の実家がある東京では開発が進んで、昔と今では全然景色が違うって言っていました。マンションなどが建つのは仕方ないけど、空は広い方がいいし。

北村：昔を大事にすることは大切だと思う。昔からある駄菓子屋や古本屋なども、ずっと残していきたいですね。

竹内：古いものでいえば、綱島には古墳もありますよね。大倉山公園から見えるスカイツリーや富士山の景色も大事にしていきたいです。



きたむら つばさ
北村 翼さん(19)
日吉出身

5年後、20年後の自分の姿は

小野川：5年後はスポーツトレーナーになるための学校に通っていて、20年後は起業して陸上の実業団をまとめていると思う。高級車に乗って、田園調布に住むのが僕の夢です(笑)。

竹内：野心的だな(笑)。僕は整体師になり、東洋医学を世界に広めたい。だから20年後は海外に住んでいて、そのために5年後は勉強していると思います。日本と海外のパイプラインになりたいです。

北村：2人みたいに夢がはっきりしているのがうらやましい。僕はまだ漠然としているけど、20年後はどこかの会社に勤めていると思います。ただ、1つ言えるのが、港北に住んでいたいし、地域のつながりを大事にしたい。日吉で育つ中で、たくさんの人に見守られている実感があったから、将来は僕が見守る側

になりたいと思います。

田邊：私も漠然としているけど、出版社に就職して、電子書籍でなく、紙の本を広められるような仕事をしていきたいです。

高原：しっかり自立して、芸術の素晴らしさを発信できる人になりたい。結婚して、子どもにも絵の魅力を教えてあげたいです。

田邊：何かを発信していくためには、言語を勉強してグローバル化に対応する必要がありますね。そのためにも、東京オリンピックはいい機会だと思います。

竹内：たくさんの外国人が区を訪れるのは、貴重なチャンスだと思う。それまでにしっかり英語の勉強をしておきたいです。

高原：最近、道を歩いていると、いろんな言語を耳にします。これからは、英語以外も勉強する必要が出てくる気がしますね。



たけうち ゆうと
竹内 裕人さん(20)
大倉山出身

20歳とは

小野川：お酒が飲めて、たばこが吸えて、国民年金へ加入する年齢。他にも、悪いことをすると実名が公表されたり、社会的な責任を問われると思う。

北村：選挙権が18歳からになったし、20歳の持つ意味は薄れてきていると思う。ただ、20歳になり、大学生活も半分を過ぎるから、将来のことを含め、自分を見つめ直すためのきっかけにしていきたいです。

田邊：私はまだ高校生で、高校に入学するときに、義務教育が終わり自由度が増す一方で、責任も増すと教わりました。20歳になると、それ以上に自分で責任を持って行動していかなければ駄目になると思う。

高原：私は2年前に20歳を迎えたけど、今でも周りの人に支えられていると思うことがたくさんあります。自己責任でやらなければ駄目というけど、そんなに身構える必要はない気がします。

竹内：確かにいろいろできるようになるけど、周りの環境は変わらないし、20歳は中途半端な年齢だと思う。自分ではそのつもりがなくても、世間的には強制的に大人。ただ、20歳は1つの節目だと思うから、これからの自分のやりたいことを考え直すきっかけにしていきたいです。